

ヨーロッパと亡命ロシア文学の接点ーマルク・スローニムについて

研究代表者 中野幸男

共同利用型の研究で北大を訪れようと考えていたのだが、夏季休暇中はもとより年末まで利用機会がもてず、生まれて初めて北海道、そして北大を訪れたのは年明けの2013年1月10日から12日までであった。二回目は3月7日から3月9日までと、合計二回制度を利用させていただいた。年明けに来た時点では、北大の調査により資料を補足・確認し、研究成果を発表、という手順が踏めずに、スローニムについて年末のASEEESで先に発表をすることになった。11月15日の”Exile and Return, Real and Imagined, in Polish and Russian Literature”というロシアとポーランドの亡命文学を扱ったパネルにおいて“Emigration and Canonization: Marc Slonim and His Predecessors in Writing History of Russian Literature”という発表を行った。北大では、具体的に見たかった資料はベルンシュタイン文庫などに保管されている世界でも稀な1920年代のチェコスロヴァキアのロシア語雑誌だったが、準備不足により望んでいた情報が得られず、関連する亡命文学関連の書籍を書庫にこもって眺めることになった。二日間も見ているわけにはいかないので、亡命文学コレクションを一通り眺めた後、整然と収集されたコレクションであるベルンシュタイン文庫を主に眺めていた。

とはいえ、もともと短期間の滞在で多くのものが得られるとも考えていなかったもので、研究会の出席を主な目的とした滞在になった。一回目の滞在では、北大滞在中の在外研究員であるアルカージェー・ブリュンバウム氏のブロークに関する発表を聞き、二回目の滞在では旧知のロシア現代文学の理論家であるマルク・リポヴェツキー氏の発表を聞いた。また、その翌日に研究員本田晃子氏によるロシア建築に関する発表を聞くこともできたのは幸いであった。事務の佐藤氏に教えていただいた図書館や研究室の設備はとても使いやすく、また、他の研究員の存在感も感じることができた。また別の機会に利用させていただきたい。